



2011.1

236

鯨組

福原恒雄
仲山清
平田好輝
白井恵子
草野早苗
坂多瑩子
佐藤真里子
山中真知子



坂多瑩子

天井裏

天井の板のすきまから見ると
辺り一面
アルミ板におおわれていて
あかるい
ゴミひとつなく
銀白色
走りたくなった

前肢の爪があたって

すべる

一直線のところ

隅をこそこそ

隠れる場所もない

天井裏がこんなにさびしいところだったとは

むかしむかし

お正月にお母さんが子どもを12匹生みました

お父さんいれて14匹になりました

2月にそれぞれ12匹ずつ生みました

毎月それぞれが12匹ずつ生みました

死ぬことなんて

考えないでいいと先生が言ったから

どんどん計算していったら

だれもが消えてしまった

ここには生活がないから

やさしく

白い月がでている

一年たったら何匹になるでしょう



草野早苗

橋のある町

石灰質の山を二つ三つ越えると
白い煙のような町が現れた
闘牛の発祥の地だというその町は
もう二ヶ月も雨が降っていないので
谷底が乾いていて
干し草のような匂いが漂っていた

「姉の家から橋がとてもよく見えるのです」

案内の男は突然ある家のドアを叩いた
「マリーア、マリーア！ アントーニオ」
ドアの上にはなぜか「神の家」と書いてある
アントニオは崖に突き出したバルコニーに
無言のまま案内した
金粉のような微粒子が真夏の光に舞い
石の橋は谷底の匂いを浴びてかすんでいた

「マリーア、マリーア！ アントーニオ」
神の家に入るまじないの言葉が反響して
私は旅の終わりを感ずると
アントニオにそれを伝えた
アントニオはそれをマリアに伝え
肥ったマリアは熱いコーヒーを持って来て
ここに何日居てもいいと言った



福原恒雄

沈黙域から

わたしの臓器にもまだ沈黙域が潜んでいて

たとえば乾いていく旅の途中だとしても

影の点ともらないあまい一点として

放たれている

いま

どこまでもつかまらない言葉が

ざらつく

地平の

どこにも 召されたなんて縫いつける

姿

ひとつない。

いま

戦い

済んで

消えた動悸のぐずつく

夜昼の歩幅から剥がれていく牧歌は

どんな果てから聞こえる？ 聞こえるか。

済んでも済んでもつづく戦いに

木も

枝葉も

砂塵も

絶えたいのちの不機嫌たちに添ううたを閉じる

陽炎のように舞う驕慢な譜面は追えるか？

ひりりひりり渴いて渴いて

どこにも見えない鋼てっのするどい嘴は

単調な視界を越えて不明の道でまたも人口を啄むか。

頬撫でてひろがる極彩の幻想を担いで

荒野

わたしの沈黙域が

たとえば凋んでいく旅の途中だとしても

耳から逃げていく風が落とした小さな足型が

聞く

きょうはきょうのように放たれた

ぬけるようなあおい空から

マ、ママァ



白井恵子

たちのぼるけむりのゆくえ

どこからか

野焼きのにおいが流れてくる
収穫の終わった田の広がり
で
籾殻の小山が黒くいぶされ

空へうっすら
まっすぐのぼる
未知へ
過去へ
ひとつの終りをつげる狼煙があがる
こげた匂いのさびしさが
すんとお腹に落ちてくる
木の葉降る道をゆく
せいたかあわだちそうゆれる角を曲る
芒の群生ゆたかに、みずいろの川をわたり
もやにつつまれる町
ふかく ふかく 身を寄せるものを探して
途方に暮れた銀杏のもと
黄色に染まり
返信の
こころも
はぐれて迷子になった



山中真知子

耳の岬

眠りのなかで
岩にくだける波だろうか
何かが遠くで
はるか遠くから水平線をゆらし
さざ波となっておしよせ
寝そべっている体を
ゆり起こそうとする

波はささやきやまない
暁を剥いで
暴風を響かせ
しけのあとの凧で
眠りに落ち行く間もなく

またドドドオとうなり声をあげる

夏のフェリーが
港に近づく舳先から投げたロープを
岸辺で受けとめる人が現われ
白い一角獣を
しとめる獵人の目つきで杖にかける
だれにも気付かれず
あなたの手の影が着岸を促した

眠りを
ゆり起こすのは
あのロープのうねり
見知らぬ人々が
忘れかけた遠い日の
ざわめきを運んでくる
つなぎ忘れた小舟は
ゆらゆら岸を離れ
入り江をさまよっていた
あれは朦朧とした
私の影に違いない

夏の夜の
花火の残響が
朝の海をゆらしていた
小舟を誘惑して
またたく間に 波の手は岸壁に突き出す
轟きが
まだ耳に
草むらにとどまっていた
海は腹部をふるわせ
笑いはじめた

耳の岬
風を受けとめ
カモメとトンビの縄張争いを見守り
異国の波の音まで聞きわけて
くずれていく砂や
崖から落下する小石の叫びを覚えている
思い出を広げ
海のアヒラを聞いている



平田好輝

門衛さん

父の勤めていた工場には
門衛さんがいた
門のところに
小さな建物があって
その中にいつも坐っていた

門衛さんはいいなア

何もしなくていいのだから
楽ちんでいいなア
わたしが本気になって父に言うと
父はひどく不機嫌な顔を見せた
工場の中で
一番つまらん奴が門衛なのだと
父はツバでも吐くように言った

けれども わたしは
門衛さんにあこがれていた
将来あんな人になりたいと
思っていた

父の仕事の部屋に行くと
大勢の人が忙しそうに一日中働いていて
夜になって幾人かの方がうちに酒を飲みにきても
やはり工場のことばかり
怒鳴り合うように話していた

門衛さんはいつも
一日中何もしないで
静かに暮らしていた
昼どきになると
魚をジュージューと焼いて食べたりしていた



仲山 清

MUTSUMIりんご

テーブルに置かれたりんごのなかへ、台所の直射日光がひだりから、水のハネのようなわたしが右から。

りんごへはいると、多孔質の白壁を螺旋階段がめぐっている。手すりには幼な子たちの手のあとが落葉のようにかさなり合い、いま初冬の風が昇り降りし、わたしはなおもはねて階段を昇っていく。

階上のドアからはすでに香りがもれ、わたしもはかなく香り、水かきのようなものをいくつも肋骨にはやしている。

おもえばかつてたがいの水かきで甘くむつみあったのだ。

種を宿してまるくなっているひとへの唐突な想いに足早になるが、からだはむしろあとずさりするもどかしさ。

風を省略してつる状にのびつづける螺旋階段はわたしの水分を汲みあげ、わたし自身は急速に枯れていく。

いへの酸味りんご酸はそんなわたしを少しは力づけ、あのひとへの夢を持続させる。しかしふたたび逢うことはないだろう。種はみずから割れてありったけの光をとりこみ、りんごぜんたいはそうして腐乱の一步てまえまで熟しつづけるだろう。

とぎすまされた刃に密着してりんごが自転する朝は、りんごのなかの螺旋階段がゆるゆるとひも状にほどけ、りんごをはみだし、この世のものではない風情で深くたれさがる。わたしもまたなすすべもなく七色に染まりながら小さくしたたり落ちる。

やがて、ぼんやりしたいくつもの半月がそらに浮かび、朝の食卓がととのう。あつまってくる家族の足はどれもぬれて光っている。習慣のほころびから発芽するには十分な水分と熱意。血だひもだとさわぎだすまでは、家族はあたたかい。そうしてわたしも彼らにつらなって食卓につき、塩化ビニールの床をしめらせている。



仲山 清

リアリティに欠けるいびつなりんご

りんごの皮をむき始めるとわたしはけさもりんごに入っていくようだ。

ガスコンロでは湯がわき始めているし、りんごに入っているひまなどないはずなのだが、皮をむく手の先から一気にからだを持っていかれる。たぶん疲れているのだ、踏ん張りがきかない、意思のありかもさだかでない、歳をとったせいかな。つまりどうとりつくろっても、果物ナイフのようにりんごのなかへーなどと、さっそうとしたものではないのだ。

視界が白いものに覆われるのは老化ではなくて果肉のせい、も

の悲しく涙目になるのも果汁が涙腺を刺戟するから。心地いいが、生理現象に感情が追いつかない、もしくは結びつかない。

りんごに丸めこまれたわたしは蒼ざめているのだろう、なにかしらせんまいの力は働いていて、なおかつその力の及ばないところに置かれているのに、めまいだけは確実におそってくる。ふらつきながら赤い薄皮に包まれていく。りんご内のもうひとつのりんごのように。

りんごに入ってしまったえば、童話のなりゆきを待つような幼稚な思惟に身を任すほかない。投げつけたりんごが、虫になった男のからだにめり込んだ話をいまさらながら思い出したりする。りんごがまるで鉄の塊でもあるかのようにからだにめり込むとは！

わたしがりんごに入り込むのとはまったく正反対の事柄がどこかにあって（あるはずもないところにりんごがあって）どうやらそれらと対になって、わたしはこの世に――煮えたぎる湯のそばにとどまっているとみえる。



佐藤真里子

ポトン・ポット

きっと
目には見えないほど
大きなポットのなか
いつか
ポトンと
落ちて
零れて
蒸発する

日常から
わざと
外れて
歩く
落ち葉の山道・峠道
いくつもの坂を
上ったり下ったり
ある日
ポトンと
落ちて
零れて
蒸発するまえに
くすんでいる
外面も内面も
粉々に砕き
森いっぱい
撒き散らして
ああ、すっきり
ついでに
ポットまで
割れたかと
かるく
ゆれてみる

■Web鯨組<http://wanigumi.com/>

新曲MP3配信

『素浪人残夢抄』

『暗闇半兵衛』

『兇状持ちの唄』 そのほか

作詞・仲山 清 作曲・SOULBOX

ネイチャー写真スライド集 約70作品

■今号の執筆者

高橋 馨●ブログ「kawolleriaへようこそ」

福原恒雄●日本現代詩人会、日本詩人クラブ／「掌」同人／詩集『跳ねる記憶』『Fノート』『生きもの叙説』『おばあさんを盗む』『体の時間』『少年のなんでもない日』他

仲山 清●詩集『サイキ』『さらば、ろくでなし』『兇器L調書』『飛行の構造』

佐藤真里子●日本現代詩人会／「二兎」「胴乱」所属／詩集『風のオルフェウス』『寒い日 もっと寒いあなたの体内へと降りていった日に』『水の中の小さな図書館』『ラピスラズリの水差し』

白井恵子●「ユタ」同人／詩集『ゆうなるかぁん』

草野早苗●写真（中島健）＋詩『TIME TO THE TIME 2002-2004』『TIME TO THE TIME 2005-2007』

山中真知子●日本現代詩人会／「gui」同人／詩集『眠りの劇場』他／時評集『詩の余白』

坂多瑩子●日本現代詩人会 日本詩人クラブ／「ぶらんこのり」「青い階段」同人／詩集『どんな眠りを』『スプーンと塩壺』『お母さん ご飯が』

平田好輝●日本現代詩人会、日本ペンクラブ／「青い花」同人／詩集『海は遠いものに』『恩師からの手紙』『ひと夏だけではなく』 小説集『孤独の舟』 随筆集『狭い部屋』他